

次に、整理番号②とした「明治三拾六年三月廿八日 神道天理々分道 家城布教所 岩嵯乙五郎所有」について翻刻を試みたい。この文書は、半紙二折綴で「病のさとし」のほかに、祝詞の見本(例文)などが記されている。

ここでは、最初に掲げられた、身体の部所、あるいは事情についての「さとし」についてみていくことにする。この点は、他の文書にみられるような、病名ごとのさとしが予想されるかもしれないが、それはあまりみられない。事情に対するさとしも含まれている。まず、44項目の一覧があり、続いてそれぞれの説明(さとし)が加えられている。(句読点は筆者、〈 〉内はフリガナ)

熱 壺

ぬくみは面足の命様の御守護であつて、血と同一なり。病気でなくとも、怒りをを發したる時、心せわしき時、勝気の性を現したる時等二身体二熱くなるを覚ゆるわ、心亢奮〈ウツ〉して、するういとなるが故にして起る場合もある。血の中に毒素含むが為に起る場合もある」(2オ)

と、すべてするりにして、我、意地、つんはり、高慢とするべし。是にたんじ、ぬくみのたらぬは、むじひ、誠の不足、働き不足。

頭 式

す要なる者にして、最も高き処故に、我、己れの理にして、すべて頭に罹る病は、我の心違、強き心の理現はるゝものなり。

手 参

なすなさぬ行ふぬの理を現す。なす為につむ埃り。なさざるが為に理のかけたる行ふうほこり。行はぬ為の」(2ウ)

口の現われるが如し。又心て人をなぐるが如し理の現われをしるべし。

指 四

左の親指、国常立の命様の御守護。天、父、夫、男、うるをい。水にかんするりいなり。

左の人さし指 五

かしこねの命様の御守護。言葉遣、及び他人主として男の、例ゑば他人を指さし、手ざして、のゝしる、笑ふが如く、りをしるべし。

左の中指 六 」（3オ）

中指びは、引だし、育て、目上、男に対する理

左のくすり指 七

月読の命様の御守護にして、突張り折れかがみ、理の立方、すなを等のう及兄弟にかんするり。

左の小指 八

伊弉諾の命様の御守護。種、しん、元、夫、夫が自分なれば我れのり。目下男のり。

右の親指 九

面足の命様の御守護。」(3ウ)

地、母、妻、女。火、血、ぬくみ、あたたか。愛。なさけ等にかんするり。

右の人差し指 十

国佐土命様の御守護の理にして、すべてつなぎのり。女の道、

足納、低き心及他人、女に対するり。

右の中指 十一

雲読の命様。のみくい出入。水気上さけ。すへで出入。かよい、かよはず。ゆうつうのり。目上女のり現わる。

右の薬指 十二

切り言葉、切口上。あいそつかし。わかれ、はなれ、すべて切理及姉妹のり。」(4オ)

右小指 十三

伊弉冉の命御守護。

苗代。育て。めぐみ、妻。妻が自分なれば自分のり。及目下又女。

足かゞと 十四

足。運び。かよい。勤め。去る順序等のり。及、ふみちがい、踏付、我が足本のり。人をける如く心遣ひ。

内また 十五

陰。くらかり。内しよ。及色情の理

膝ひざ 十六

順じよ。すなを。折れかゞみ等なり。」(4ウ)

顔 十七

かをは見る処。見らるゝ処として、心のり、感情の現はる所なり。又自己の因縁の一切現はる処なれば、容貌、面相、骨相により、其人の運命、因縁をしる事を得、而して顔二かゝる、顔をつぶす、顔の立たざる、顔をする、人の顔を焼く、夫の顔をつぶすと云ふか如くり。其かゝる病とに照して思案す。

目 十八

見分けて、以て人の道を全ふすべき者なれば、すべて見るり、くらますり。」(5オ)

及び家のシン芽にりを現はす。

耳 十九

聞分の道具なれば、聞分のり一切に付思案す。言葉とみつせつもの者なれば、聞違ひ、聞分のなき、早さととり、さととり違ひ、耳さからい、勝手思案等のり。

はな 二十

高慢。かざり心。色情等のり。

口 二十一

口は飲食及呼吸。言葉の上二必要なる道具にして出入あり。」(5ウ)

くい分のみ分。かみ方。欲、誠等のりを現はすと共に、言葉遣ひ、口強き、口きたなき、口悪き、口荒き等のり。

歯 二十二

歯はかみ分の道具。かみ分て舌にあじをもたすものなり。故に、かみ分。くい切。即ち決だん。及あじわいを作り、味をもたすり現わされた。又、歯は言葉の上二も関するを以て、此上ヨリ現はれる者と知るべし。」(6オ)

髪 二十三

かみわ最高部に生する者にして、脳即ち頭をかこうものなり。あたまわ[ありみたま]、かみは神知らずなり。神のりなり。即ち、天、神、天徳、神の恵みにかんする。髪の毛のうすきわ天徳のうすういを現わす者なれば、髪に関する理は、此のりいより押しして思案す。

(次号に続く)